



Title	『忠度集』季節詠にみえる不遇意識：「三月尽」題を中心に
Author(s)	井上, 京音
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2025, 11, p. 57-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102723
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『忠度集』季節詠にみえる不遇意識

―「三月尽」題を中心に―

日本文学・日本語史学 博士前期課程1年

井上 京音

1.はじめに

本発表では、平忠度（一一四四―一一八四）の私家集『忠度集』を扱う。

忠度は、平清盛の異母弟で、平安末期の武士であり歌人である。

『平家物語』には、忠度が都落ちの際に、自らの和歌集を藤原俊成に託したとする話が収められる。この「忠度都落」は、高校古典の教材として取り上げられることも多く、現代でも広く知られる。そのためか、忠度に関する先行研究は『平家物語』や謡曲に関するものが多く、歌人としての忠度を論じるものは多くない。

忠度の和歌集に『忠度集』がある。『平家物語』での忠度の和歌集は、俊成に渡すことを目的としたものとして描かれる。しかし、『忠度集』は、賀茂社に奉獻するために作られたとされる。そのため、両者を同一視することはできないだろう。物語における忠度の和歌集と『忠度集』、ひいては『平家物語』中の忠度と歌人の忠度は、区別して捉える必要がある。

『忠度集』に関する先行研究は伝本や成立事情を論じたものが多い。忠度の和歌に関しては父・忠盛や兄・経盛と並べられ「平家歌人」という枠組みで論じられることが多く、「平家歌人」に共通してみられる和歌の言葉や特徴に焦点が当てられてきた。忠度個人に着目し、その和歌表現に注目した考察は少ない。『忠度集』全体を通した研究も十分にないといえない。

そこで、本発表では物語的枠組みや「平家歌人」と括られた枠組みを離れ、『忠度集』にみえる和歌表現に込められた忠度の意識を明らかにすることを目的とする。特に、「三月尽」題をはじめとして、単なる季節詠に留まらない四季部の歌に着目したい。

2.『忠度集』の雑部にみえる不遇意識

『忠度集』は、忠度自ら撰じた¹とされる²一〇三首（忠度歌一〇〇首、他者の贈歌・答歌三首）で構成された和歌集である。この一〇三首の和歌は、春部・夏部・秋部・冬部・恋部・雑部と、部立ごとに分けて配置される。雑部には四季部や恋部に属さない歌、主に人との贈答歌や仏教に関する歌が分類される。

¹ 森本元子『私家集の研究』（明治書院、一九六六年）の指摘による。

² 注1 前掲書による。

『忠度集』の雑部に忠度の不遇意識がみえることは、早く井上宗雄氏による指摘がある³⁾。井上氏は、忠度に関する記録に七年余りの空白期間があることを不審としたうえで、「身近な人の死というような事もあるかもしれないし、病氣ということもありうる」と他の可能性も挙げつつ、不遇の状況にあった可能性を次の贈答歌をもとに指摘する。

嘆くこと侍りけるころ、同じ様な人のもとより申し送りて侍りける

87 侘人の涙に濡るる袖にまた秋は露さへ置くぞ悲しき

返し

88 さもこそは同じ嘆きといひながら露も変はらぬ袖の上かな（忠度集・雑）⁴⁾

87 番歌の詞書からは、詳細は不明だが、この歌が詠まれた秋に、何らかの「嘆くこと」が忠度にあったことが分かる。

歌の内容を確認すると、秋の露に言寄せて袖にかかる涙を託ち合う内容である。87 番歌にみえる「侘人」は、「傷心の人。失意の人。悲しみ痛む心を持つ人や、世に用いられず失意にあったりわびしい暮しをして不本意であると思ったりしている人」⁵⁾を指す。この歌を贈答する両者の間に、同じような辛さ、不本意な思いが共感とともに存在したことは確かである。井上氏の指摘するように、不遇を詠んだ和歌とみておく。

87・88 番歌は秋の露を詠み込んだ歌だが、不遇を託つことに主眼を置いたためか、秋部ではなく雑部に収められていると考えられる。では、他の歌ではどうだろうか。忠度の不遇意識は雑部のみならず四季部の歌からもうかがえる。

3. 『忠度集』の「三月尽」題の歌にみえる不遇意識

『忠度集』の四季部では、各四季の部立内においても歌の内容が時節の移り変わりをなぞらえるように並んでいる。例えば春部をみると、「立春」という題の歌で始まり、「三月尽」つまり陰暦三月の末日のことで、春の終わりを詠む題の歌で終わる。「三月尽」題の歌は、左掲の先行歌に代表されるように「往く春を惜しみ、また春の移ろいに我が身を重ね合わせて老いを嘆く」。内容が一般的に詠まれる。

三月尽

306 常よりも今日の暮るるを惜しむかな今いく度の春と知らねば

（堀河院百首・春・大江匡房）

³⁾ 井上宗雄『平安後期歌人伝の研究 増補版』（笠間書院、一九八八年）による。

⁴⁾ 本発表における『忠度集』の本文は、冷泉家時雨亭文庫本「忠度朝臣集」（財団法人冷泉家時雨亭文庫『冷泉家時雨亭叢書 26 中世私家集二』朝日新聞社、一九九五年 所収）を発表者が翻刻・校訂したものをを用いる。『忠度集』以外の和歌の本文は『新編国歌大観』（日本文学 w e b 図書館）による。なお、歌番号はすべて『新編国歌大観』による。

⁵⁾ 『角川古語大辞典』「わびびと【侘人・詫人】」項（ジャパンナレッジ）による。

⁶⁾ 佐藤道生 担当『歌ことば歌枕大辞典』「三月尽」項（日本文学 w e b 図書館）による。

では、『忠度集』の「三月尽」題の歌はどうか。

人々三月尽の歌詠み侍りしに

19 我が身にはよそなる春と思へども暮れゆく今日は惜しくやはあらぬ（忠度集・春）

忠度の歌も往く春を惜しむ内容ではあるものの、「春」を「我が身にはよそなる」と、自身には関係のないものと表現する点が特異である。「よそなる」に「春」が結びつく表現は先行する歌にはみられない。忠度の歌以前では、「よそなる」には「人」や「君」が結びつき、他者と自身との隔たりを表す歌が多い。また、先行するほかの歌人の「三月尽」題の歌で、「春は自身には関係のないものである」といった内容が詠まれている例はみられない。

誰にでも訪れる「春」という季節が、自身には関係ないとはどういうことであろうか。

「春」は栄達を含意する場合があり、「春」すなわち栄達から疎外されているという不遇意識が詠み込まれているのではないかと考えられる。

19 番歌は、同時代の惟宗広言撰の和歌集『言葉集』にも収められる。『忠度集』では春部に入るこの歌は、『言葉集』では述懷部にみえる。述懷部の歌は、老いの嘆きをはじめとし、自身の考えや訴えが広く詠まれるが、特に我が身の辛さが詠まれる。広言は、忠度の「三月尽」題の歌を単なる季節詠に留まらないと判断し、述懷部に入れたのだろう。

19 番歌は、三月尽における往く春を愛惜する内容を詠みつつも、そこに自身の「春」からの疎外感、不遇意識を色濃く詠み込んだ歌であるといえる。

『忠度集』内で同じく春と我が身について詠む歌が、「除夜」という題で冬部の末尾にある。この「除夜」題の歌にも「春」への疎外感がみえる。

4. 『忠度集』の「除夜」題の歌にみえる不遇意識

「除夜」は大晦日の夜のことで、左掲の先行歌に代表されるように「過ぎ行く年に、嘆老の思いを新たにしたり、さまざまな思いが去来し、それを託しうる」⁸内容が詠まれる。

除夜

1118 過ぎぬれば我が身の老いとなるものを何ゆゑ明日の春を待つらん

（堀河院百首・冬・肥後）

では、『忠度集』の「除夜」題の歌はどうか。

除夜

60 人数にあらぬを嘆く我が身さへ春と明日より祝ふべきかは（忠度集・冬）

この歌について、瀬良基樹氏は次のように指摘する⁹。

⁸ 村尾誠一担当「歌ことは歌枕大辞典」「年の暮れ」項（日本文学web図書館）による。

⁹ 瀬良基樹『「忠度集」の歌語「人かずにあらず」について』『岡大國文論稿』29巻（二〇〇一年三月）による。

歳暮における寄る年波への嘆きを直接表面に出さずに、除夜における「人かずにあらぬ」ことへの悲哀感と新春を寿ぐ心情との矛盾を中心に歌っている。新春を迎えることへの慶祝感よりは、現在の自分の不遇な状況への嘆きを主にしている。

一般に、「除夜」題の歌は、迎える春を喜んだり老いを嘆いたりすることに主眼が置かれる。しかし、忠度の「除夜」題の歌は、従来の「除夜」題の主眼とは異なる意識のもとで詠まれていると解される。自身が「(一人前の)人数にも入らない」ことを嘆き、明日から「春」であると祝うべきものであろうか、と「春」に対する疎外感や不遇意識が詠み込まれている。

ここで、「三月尽」題の歌と「除夜」題の歌を並べてみると、表現と内容に共通性が見出せる。

19 我が身にはよそなる春と思へども暮れゆく今日は惜しくやはあらぬ (忠度集・春)
60 人数にあらぬを嘆く我が身さへ春と明日より祝ふべきかは (忠度集・冬)

両首には「春」と「我が身」という表現が一致し、「春」と「我が身」には隔たりがあるという内容が共通してみえる。「春」が喜び愛惜されるべきであることを前提に、素直にそう思えない「我が身」に主眼が置かれる。これら二首を呼応させると、忠度には「春は、(一人前の)人数にも入らない我が身には関係がない」という不遇意識があると考えられる。

5. おわりに

以上、『忠度集』は、雑部のみならず四季部の季節詠の題のなかでも忠度の不遇意識がみえ、そこには独自の表現と内容がみられることを確認した。

雑部の87・88番歌には、秋に自身の置かれた状況を嘆いている様子がみられた。また、春部の「三月尽」題、冬部の「除夜」題においても、忠度は不遇意識を詠み込んでいた。本発表で挙げた歌によって、春部・冬部・雑部と『忠度集』には、忠度の不遇意識が点在していることが分かる。特に、春部の末尾と冬部の末尾には、共通した表現が用いられており、忠度の単なる季節詠に留まらない不遇意識が目立った。

春が終わる「三月尽」、春を迎える「除夜」の二題は、春を喜び愛惜する内容が一般に詠まれる。季節詠に留まらないとしても、季節が巡るイメージから老いが連想され、その嘆きが詠まれることが主である。だが、『忠度集』の「三月尽」・「除夜」題に込められているのは「春」への疎外感であり、各題の同時代までの和歌としても特異であった。

今後これらの歌をはじめとし『忠度集』全体を通して、和歌表現の解釈をしていくことで、忠度の詠歌による意識を探りたい。そこから、忠度の歌人としての位置づけ、『忠度集』の歌集としての特質をも明らかにできると考える。